

## 多摩の昆虫（2）

市郷土資料室では、多摩地域の昆虫標本約620箱を所蔵しています。これは、1980年に当時市立西中学校の教諭であった北原俊幸先生から市に寄贈されたもので、郷土資料室の貴重なコレクションの一つとして現在も毎年標本の展示を行っています。

昆虫が採集された時期からほぼ半世紀が経ち、今号も、昆虫の世界から見た多摩地域の環境の変化について、北原先生に寄稿いただきました。

前回の「くるめの文化財」では『多摩の昆虫（1）』としてチョウのことについて書きました。身近にいる昆虫の中でも目立つものが多いので、このチョウのことについて触れました。

私は、十二歳の年から二十年間ほど清瀬に住み、その後十五年間東久留米に住んでいました。この間に採集した標本のうち、チョウについてまとめると次のようになります。

- |           |   |
|-----------|---|
| 【アゲハチョウ科】 | ジャコウアゲハ、アオスジアゲハ、カラスアゲハ、モンキアゲハ、キアゲハ、オナガアゲハ、クロアゲハ、アゲハ   |
| 【シロチョウ科】  | モンシロチョウ、スジグロシロチョウ、ツマキチョウ、モンキチョウ、キタキチョウ、ツماغロキチョウ  |
| 【シジミチョウ科】 | ウラギンシジミ、ゴイシシジミ、ベニシジミ、ルリシジミ、ツバメシジミ、ウラナミシジミ、クロシジミ、ヤマトシジミ、ウラゴマダラシジミ、ミズイロオナガシジミ、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミドリシジミ、オオミドリシジミ、トラフシジミ                |
| 【タテハチョウ科】 | コムスジ、ミスジチョウ、アサマイチモンジ、イチモンジチョウ、クジャクチョウ、ヒメアカタテハ、アカタテハ、ルリタテハ、キタテハ、ヒオドシチョウ、オオムラサキ、ゴマダラチョウ、ミドリヒョウモン、サトキマダラヒカゲ、ヒカゲチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ヒメジャノメ |
| 【セセリチョウ科】 | ダイミョウセセリ、ミヤマセセリ、ヒメキマダラセセリ、イチモンジセセリ、オオチャバネセセリ、コチャバネセセリ、キマダラセセリ、ギンイチモンジセセリ  |

その他、ツماغロヒョウモン、ムラサキシジミなど、目撃したものを加えるとさらに種類は増えますが、採集した標本として残っているものは、以上の五十四種になります。

このうち現在もよく見られる種類というのは、三分の一程度になってしまったように思われます。食草となっている植物がなくなったりする環境の変化が大きな要因となっています。



時々見られるウラギンシジミ



現在もよく見られるヒメアカタテハ



食草のウスバサイシンが植えられたことによって増え始めたジャコウアゲハ

さて、チョウ以外の昆虫ではどうなっているか、いくつかの例で考えてみます。

トンボの仲間では、オオイトトンボ、クロイトトンボ、オツネイトンボ、ギンヤンマ、ヒメクロサナエ、オニヤンマ、ミヤマアカネ、ナツアカネ、アキアカネ、オオシオカラトンボ、シオカラトンボ、シオヤトンボ、ハラビロトンボ、ウスバキトンボなどが見られましたが、今は、学校のプールなどに産卵して育つアキアカネなどが多く見られる程度で、トンボ全体は種類数も個体数も減ってしまいました。



オニヤンマ



アキアカネ

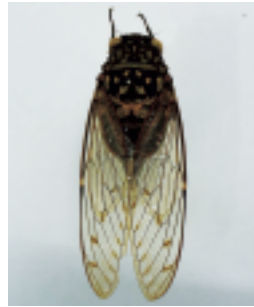
セミの仲間はヒグラシ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクホウシ、ニイニイゼミなどが見られました。前四種は今でもいるようですが、ニイニイゼミの姿はほとんど見られなくなってしまいました。最近では、地球温暖化の影響のためか、以前は西日本にしかいなかったクマゼミの鳴き声を聞くことができるようになってきたようです。



ヒグラシ



アブラゼミ



ミンミンゼミ



ツクツクホウシ



ニイニイゼミ

ゴキブリの仲間は、人間の生活と深いかかわりを持っているヤマトゴキブリやチャバネゴキブリなどは健在のようです。一方、雑木林などに生活するオオゴキブリのような種類は少なくなってしまいました。オオゴキブリは倒木等の下などに生活しているので、そういう条件がなくなってしまうと、当然見られなくなってしまいます。

カマキリの仲間は健在のようです。餌となる昆虫などがいればどこにでも見られるといえます。



ヤマトゴキブリ



現在でも多く見られるカマキリ

甲虫の仲間では、オサムシ科のヒメマイマイカブリなどは多く見られましたが、今はほとんど見る事ができません。アオオサムシも同様です。

コハンミョウ、コニワハンミョウ、ニワハンミョウ、トウキョウヒメハンミョウ、ハンミョウといった昆虫も畑の畦道などに多く見られましたが、今は少なくなってしまいました。

クワガタムシ科では、ノコギリクワガタ、コクワガタなどが多く見られました。ヒラタクワガタも少なからずいましたが、今はもうほとんど見る事ができません。

コガネムシ科の代表は、カブトムシです。カブトムシは人の手による保護もあってまだ見られるようです。カブトムシと同様に幼虫が腐葉土を食べるカナブンはまだいますが、黒カナブンのほうはかなり珍しくなりました。コナラやクヌギなどの葉を食べるコフキコガネは、時折光を求めて飛んでくることがあります。家庭菜園などがあるところには、マメコガネなどがまだたくさん見られます。

タマムシ科の中では、タマムシ（エノキ、ケヤキ、サクラなどを食べる）やウバタマムシ（マツを食べる）などの大型の仲間もたくさん見られましたが、今はタマムシがごくまれに見られるだけになってしまいました。

テントウムシ科では、アブラムシなどを食べるテントウムシやナナホシテントウなどは今でも多数見ることができます。ニジュウヤホシテントウやオオニジュウヤホシテントウのようなナス科植物を食べるテント

ウムシの仲間は、栽培されているところで、しかも農薬が使用されていないところでは、まだ見ることができます。

カミキリムシ科では、クリやクヌギ、シイなどを食べるシロスジカミキリ、クワなどを食べるトラフカミキリやクワカミキリなどの大型のカミキリムシは少なくなりました。ゴマダラカミキリ（ミカン、ヤナギ、クリ、クワ、プラタナスなどを食べる）やノコギリカミキリ（針葉樹やクヌギなどを食べる）などはまだ見られるようです。



現在でもたくさん見られるマメコガネ



現在でもたくさん見られるテントウムシ

ガは、特に大型のヤマユガ科について取り上げます。オナガミズアオ（ハンノキを食べる）、オオミズアオ（バラ科、ブナ科など多数の植物を食べる）、ヤマユガ（クヌギ、コナラ、クリなどを食べる）、ヒメヤマユガ（サクラ、ナシ、ウメ、クヌギ、コナラ、クリなどを食べる）、ウスタビガ（クヌギ、コナラ、クリなどを食べる）、クスサン（クヌギ、コナラ、クリなどを食べる）などの、ほとんどすべてが見られなくなりました。

ハチの仲間の減少も目立ちます。オオスズメバチ、クロスズメバチ、フタモンアシナガバチ、キアシナガバチ、セグロアシナガバチなど、以前はかなりいたのですが、現在は少なくなりました。トラマルハナバチやクマバチは時折見かけることがあります。



オナガミズアオ



クスサン



オオスズメバチ

現在、昆虫標本を文化財として保管し始めている自治体が増えてきています。標本は、生物学の研究のみでなく、環境の変化を研究することにも役立っています。

(北原 俊幸 東久留米市文化財保護審議会委員)

〔編集〕 東久留米市郷土資料室（教育委員会生涯学習課文化財係）

〒203 - 0033

東京都東久留米市滝山4-3-14 東久留米市わくわく健康プラザ内

電話 042 - 472 - 0051 FAX 042 - 472 - 0057